国家の輪郭と越境
第四回研究会『Mother India』PartⅣを読む　報告書

日時：平成 21 年 6 月 30 日 15～17 時
場所：大阪大学箕面キャンパス総合研究棟 6 階「国家の輪郭と越境」プロジェクトルーム
参加者：5 名
テキスト：『Mother India』(Part IV pp.221-317)
　　Katherine Mayo, 1927, Blue Ribbon Books, New York
担当者：中谷　純江（大阪大学　非常勤講師）

Part IV では、インドの発展を妨げている要因が考察され、インドの貧困や困窮はイギリス支配がもたらしたものではなく、インド人自身に責任があるということが繰り返し主張されている。

まずメイヨーは、インドでは近代技術に基づいた「酪農」という概念が普及しておらず、非常に原始的に牛が使役されていることを指摘する。西洋近代知識が欠如しているために、劣悪な品種は改良されず、また飼料不足や過放牧を招き、結果として経済効果が上がらない。メイヨーの指摘はもっともであるが、欧米とインドではそもそも気候が違う点や、それを補う灌漑設備がほとんど普及していない点に関して、メイヨーが一切言及していない点についても留意すべきであろう。加えて家畜が非常に残酷に扱われており、牛保護協会による保護が名目のみであることが強調されている。牛保護舎（gaushala）がいかに不衛生で、かつ誤った管理のもとにあるのかについて、メイヨーは自身の経験や数名のインフォーマントの証言をもとに熱心に描写している。神聖視されているはずの牛が非常に残酷に扱われていることを、メイヨーは西洋的な動物愛護の観点から繰り返し非難すると同時に、屠殺業者に抵抗なく牛を売りながら、ムスリムが犠牲祭で牛を殺すことには過剰に反応するヒンドゥーの二面性を指摘している。興味深い指摘ではあるが、しかしごくわずかの証言をもとに、ヒンドゥーならびに牛保護舎を糾弾する点、並びにインフォーマント自体に偏りがある点について、出席者からの疑問の声が相次いであがった。

続いて、英国統治前のインドには「黄金時代」があった、という世論への反論として、メイヨーは「インド史」を語り始める。しかし彼女は資料について、「大衆についての公的記録は存在しない」と断言し、西洋人の旅行記という書き手の主観に満ちた文献を挙げるのみである。そしてそこに描かれた貧困、子売り、奴隷制度、ハーレム、人食といったセンセーショナルな出来事を、あたかもインド全土で常時起こっていたかのように誇張して描いている。

さらにメイヨーはインド統治法の改訂を取り上げ、それによってうまれたインド人議員について、各々の帰属カーストや宗教の利益のみを追求し、民衆を代表していおらず民主主義は名前のみである、と批判する。メイヨーは、統治法改革案自体を疑問視することはなく、ただインド人に政治を任せると不正が起こるということを示唆するのみである。続いて、イギリス統治が及ばない藩王国の状況を提示する。その際にも、メイヨーは英国人理事官が在住する藩や、英国での教育を受けた藩主のいる藩、つまり英国の影響下にある藩は近代的かつ平和であり、一方でそう

でない藩は「アラビアンナイトの無修正版」のように混沌としていると強調するのである。

全体を通して、インド人支配者や行政者がもたらしている混乱、不平等、搾取と、英国統治がもたらした進歩、正義、平和が対照的に描かれており、英国による統治こそがインドに光をもたらしたという主張が繰り返され、第 21 章はドラマチックな一文で締められている。「1858 年、ぼろぼろのみすぼらしい衣をまとった、病気の、貧しく年老いた母なるインド（Mother India）は、ついに別世界との境目に立った。そして、見えなくなった目を頭上に掲げられた新しい旗に向けた。以後、今日まで彼女になされた、信じられないほど多数の誓約が実行されてきた。最後の主人が彼女にもたらした、建設的奉仕、民主主義、民衆の福祉という贈り物を、これまでずっと奴隷であった彼女が、いったいどうやって信じることができるだろうか？」

第３部に続き、全体を通してメイヨーの強い関心、主張があまり感じられない第４部であった。研究会の会場からは、この部分は特に、意欲的に綴ったというよりも当局から雑多な資料を渡され、指示のもとで買いたのではないか、という推測の声も上がった。本書の最終部となる第５部は、ヒンドゥーとムスリムの対立、両者の断裂こそがインドの現状を作り出している、という主張から始まる。メイヨーがコミュナル問題をどのように描いたのか、その問題意識を分析考察するとともに、参加者全員で本書を総括したい。

第四回の研究会には、本プロジェクト関係者１名の他、大阪大学非常勤講師を含めた美術史、人類学等さまざまな研究分野の若手研究者に加え、学部生の参加もあった。分野を超えて集まり、一冊のテキストを同時に論じることは、地域研究の発展を模索する上で非常に有益な作業であるといえるだろう。

最後に今後の計画を話し合い、第五回の予定ならびに担当者を決定した。

今後の予定は以下の通り

第五回研究会：7 月 14 日 15 時～17 時（PartV） 於大阪大学箕面キャンパス

文責　小松久恵（第 5 班プロジェクト研究員）